

2021年1月

国際武道正風会副会長

日本傳柔術研究会柔徳塾主宰

合気道九段 日本柔術九段

吉田 信正



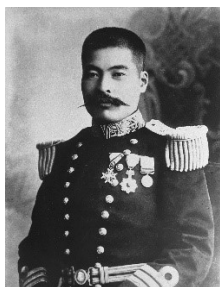
柔道の創始者として知られている嘉納治五郎（1860～1938）は本来、偉大なる教育者であった。彼は明治維新後、日本のこれからの教育のあり方について生涯尽力し国家に貢献された。特に青少年や明治維新という革命によって生きる目標を失った若者を指導育成する手段として、彼は自ら鍛錬している日本古来から伝えられている柔術を整理改善し、名称を「柔道」と改め指導育成した。それは教育の3要素である「知育」・「徳育」・「体育」のうち、「徳育」と「体育」を合体した理念に基づく指導方法であった。

「知育」は知識教育。「徳育」は道徳と倫理に関する教育。「体育」は健全な体力育成。当時嘉納の理念に賛同した剣術家高野佐三郎は「剣道」と称し後年、空手家は「空手道」、合気柔術の植芝盛平は「合気道」となった。これらを総称して「武道」といわれるようになった。その目的は人間教育法である。特に最も嘉納が重視したのは「徳育」であった。彼の論文では下記のように述べている。

{道徳を説くには一種の信仰とかいうものによって説くと、その信仰を有する人にはよいが、他の人々を納得させることは不可能である。しかし諸々の宗教人やそれを認めない人でもそれを認めざるを得ない「根本原理」に基づいて説かねばならない。それは「自他共栄」ということである。人が共同生活している以上、相互の間を融和協調し（中略）他人よかれと考えてこれを行い、己をもよくする。即ち「自他共栄」をはからねばならない。}

現在も講道館柔道の理念は「精力善用・自他共栄」である。

すなわち身心の力を最も有効に使用する道が柔道であり、身心は丈夫になるし、お互いに尊重し合い切磋琢磨により技能を高め、徳を養うことができる。また嘉納はこの合理性は知を磨く応用にもなると述べている。



広瀬武夫（1868～1904）は海軍兵学校時代19歳の時（1886）、講道館に入門。当時講道館の門人は100名を超える状況となり世間一般に認知されるようになった時期であった。記録によれば1892年には門人2000名をこえている。

広瀬は嘉納治五郎の柔道理念に感銘し、また嘉納も頭脳明晰な広瀬を高く評価、期待をかけていた。

広瀬が感銘を受けた嘉納の言葉は「柔道は技を修練するだけでなく、それによって鍛錬した身心をもって国民としてなすべきことを自ら選び成すこと」。すなわち自ら選んだ海軍の軍人として邁進し社会活動に貢献することであった。そしてさらに「自他共栄」という教えであった。

広瀬は兵学校の厳しい教育訓練の間をぬって講道館に通い稽古に励み 1893 年 3 段を授与される。1897 年ロシアに留学、駐在武官として 6 年滞在している。ペテルブルグ滞在中は彼の高潔で好感持てる性格からかロシア貴族や軍士官と広く交流があった。真偽のほどは分からないがニコライ 2 世の前で柔道を披露したという逸話があるが恐らく交流のあった士官と柔道の稽古をしたことであろう。ロシア滞在中の 1899 年に柔道 4 段が授与されている。ロシアに柔道を普及した功績も考えられる。

1904 年日露戦争が勃発。広瀬少佐は旅順港閉塞作戦に参加。この作戦は旅順港に駐留するロシア艦隊を封じ込めるため大型の船を港の出口に自爆沈没させるものである。

自爆船から離れる途中、ロシア軍の砲弾が頭部に直撃し戦死 36 歳であった。遺体はロシア軍により収容され荣誉礼をもって丁重な葬儀が行われた。これは彼がロシア滞在中多くの士官と交流し彼の名前は知れ渡っていたためと言われている。日本では軍神と崇められ小学校の教科書に載ることになる。嘉納は広瀬の訃報を知り、ひと目もはばからず男泣きしたと言う。

嘉納はこの時 44 歳で高等師範学校校長や文部省の教育審議委員など要職にあり講道館の門人は 1 万人を超え著名な存在であった。

柔道は国家の強兵政策により広く普及推進された。一方試合に勝つ実力主義が尊重されるようになっていった。一般的に腕力豪放な者達は哲学的な思考が苦手なものである。嘉納が目的とする「教育柔道」とかけ離れていった。広瀬は嘉納の「教育柔道」を最も理解した門人の一人であった。嘉納は広瀬の文武両道の活動を期待していたものと思う。

「自他共栄」は「Mutual Respect and Prosperity」であるが、そこには「寛容さ」(Generosity)と「思いやり」(Compassion)がなくてはならない。

広瀬がロシア滞在中、多くのロシア貴族や士官と交流し友人を得ることができたのは、この精神があったからと思う。

ロシア軍により遺体を収容され荣誉礼をもって丁重な葬儀が行われことは、これをものがたっている。

このたびロシアの日本文化および武道研究家 PhD. Anton Lestev がロマノフ王朝と柔術についての出版にあたり敬意をもってこれに関連する記事を寄稿する。